

 シーズ「きょうだいの思い」29

『パニックの日々』

弟が20代前半の頃は、とにかくパニックの連続だった。
当時の私は、平日は仕事だったので、家で弟と過ごす時間は夜～朝の間だったが、頻りに激しいパニックを起こす弟にはウンザリしていた。

自宅は集合住宅のため、母は階下への騒音に神経をすり減らしていた。
大きな体でドンドンと跳び跳ねる、仰向けに寝転んだ状態で足をバタバタさせる、拳で床や壁を叩く、奇声を出す...近隣の人達に迷惑をかけていたのは十分にわかってはいたが、深夜のパニックの最中に階下の住人から苦情の電話がかかってくることは、母はただただ謝罪の言葉しか出なかった。自閉症のパニックを抑えることなんて出来ない。パニックが起き始めてから精神安定剤を飲ませても、あまり効き目がない。効き目が表れるとしても、ある程度の時間が経ってからだ。

いつも母は、翌日に階下の人へお詫びに行った。私も階段でスレ違う時にはお詫びの言葉を伝えた。それまでの、階下の住人からも苦情を受けてきた。遠回しに、引越しを勧める人もいたと母から聞いたこともある。

弟がパニックを起こす時間帯は、父は仕事で不在が多かった。深夜の真っ暗な部屋で、暴れる弟の足元に、せめてもの騒音対策で何枚も布団を重ねて敷き、奇声を出す口元をタオルで覆い、絞り出すような声で「頼むから静かにして」とうなだれる母の姿は、今でも覚えている。真っ暗な部屋なのは理由がある。今でこそ、このこだわりは弱くなったが、弟は就寝時には豆球の灯りですら嫌がった。

パニックの最中に部屋の灯りを点けようものなら「デンキ、ケス!」と、余計にパニックを助長するようなものである。私は弟のパニックに耐えきれず、よく家を飛び出して友人宅へ行ったり、車でウロウロと時間を潰していた。私には車が唯一の『独りになれる場所』だったので、当時は車のことを『動くマイルームやわ!』と思っていた(笑)。逃げ場がある私でも、やり場のない感情を母にぶつけていた。

弟にぶつけられるなら、私が怒ってパニックが収まるなら、もう体当たりで弟を粉々にしたいぐらいだった。仕事でも前夜の弟のパニックを思い出して、気持の整理が出来ない私はよくトイレで泣いていた。

健全者なら『第2の思春期』と言うべきか？
なぜ20代になっても弟が落ち着かない時期が続いたのかわからない。あのパニックの連続は何だったのだろう。当時は家族の誰もがしんどかったが、でも一番しんどかったのは弟だったと思う。

過ぎ去った今だからこそ、そう思えるのだが、あの渦中にいた時期は弟を思いやれる余裕なんてなかった。私は、きょうだい＝姉として育てきて、母の“苦勞”をそれなりに察してきたつもりだったが、当時のあの窮地に立つ母の姿は強烈だった。

私が知らない昼間の時間や、家の外に出た時にも、きっと様々なことがあっただろう。当時を思い出す度に、あの真っ暗な部屋で、母はよく弟に手をかけなかったものだと、言葉に表しようがない気持になる。

まえほ通信

発行日	2014年6月1日
発行元	自立センター前穂 〒569-1022 高槻市日吉台 1番町21-18 072-689-8600



 大阪府集団指導に参加して

平成26年5月28日(水)に高槻市現代劇場において障がい者総合支援制度の集団指導に参加して参りました。

福祉、労働、消防、建築などの制度の管轄の縦割り構造の中で、横断して提供される公的サービスを正常に維持するためには、今迄以上に精緻な管理体制が事業者に求められているとの認識に至りました。

日々、様相を変える現場の中では難問だと感じられましたが、障がいのある方々の居場所を守り続けるために指導内容を遵守して参る覚悟です。

